第17回南のシナリオ大賞

みずあかりに想いを馳せて

登場人物

倉田桃花（25）　ウエディングフォトグラファー

倉田律子（56）　桃花の母

武藤武雄（60）　律子の婚約者

鈴村博人（25）　桃花の同僚

「みずあかりに想いを馳せて」　あらすじ

ウエディングフォトグラファーの倉田桃花は、ある日仕事中に母親の倉田律子に呼び出され、婚約者の武藤武雄を紹介される。バツ3で男性遍歴のある律子の結婚を認めたくない桃花は、「結婚式の写真を撮って欲しい」という律子の頼みを断る。

仕事中、桃花の元に結婚式場の予約をしに来た律子と武藤が現れる。桃花は律子が新婚旅行に、桃花が亡き父と初旅行をした思い出の場所に行くと言い出し、大激怒。二人の結婚を認めず、その場から立ち去る。

幼い頃、父と遊んだ公園に来る桃花。追いかけてきた律子から、桃花は新婚旅行は別の場所に行くと言われる。

桃花は律子と父の思い出を語りながら、律子が武雄を選んだ本当の理由を知り、父との思い出の場所に武雄と行くことをすすめる。

結婚式当日。桃花は律子と武雄の幸せそうな姿を写真撮影する。

SE　カフェの店内の雑踏。

桃花「で？　話って何？」

律子「母さんね、結婚するの！」

桃花「はっ？　結婚？」

律子「そう」

桃花「結婚って……。母さん、何回目だと思ってるの？」

律子「今度は本気」

桃花「その言葉、毎回聞いてる」

武雄「あの……。お話し中、すみません」

桃花「はい？」

武雄「この度、律子さんと結婚させていただくことになりました、武藤武雄と申します」

桃花「どうも」

武雄「お話を遮るのは、失礼かと思ったんですが、一応、ご挨拶をと思いまして」

桃花「そうですか」

律子「どう？　武雄さん、真面目な感じで、素敵でしょ？」

桃花「もう！　忙しいから、話がそれだけなら帰るよ？」

律子「ちょっと待って！　今日はあんたに折り入って、お願いがあるの」

桃花「何？」

律子「結婚式の写真、あんたが撮ってくれないい？」

桃花「はぁ？」

律子「ほら、あんたプロだし。それに結婚式の写真って、後々残るから、綺麗に撮ってもらいたいのよ」

桃花「そんなの私じゃなくて、他の人に頼めばいいじゃない？」

律子「娘のあんただから、お願いしてるのよ」

桃花「私は絶対に嫌！　結婚も絶対反対！　式の写真なんて、誰が撮るか！」

ＳＥ　ドアの開閉音

桃花「戻りました！」

博人「お帰りなさい！」

桃花「鈴村君、今日はありがとう」

博人「いや、別にいいよ。俺も今日は勉強させてもらったし」

桃花「途中で抜けちゃって、ごめんね。あの後、大丈夫だった？」

博人「確かに集合写真で、ちょっとごたついたかな。でも何とか無事に撮影終わったよ」

桃花「良かった～」

博人「桃花の方は、大丈夫だった？」

桃花「あ、うん……。（小声で）母親が5回目の結婚するなんて、恥ずかしくて口が裂けても言えないわよ」

博人「えっ？　なんか言った？」

桃花「ううん、別に」

SE　カメラの連続シャッター音。

桃花「はい、いいですよ～。新郎さん！　顔、怖いですよ～。もう少しにこやかに笑って」

博人「桃花、受付にお客様が来てるけど？」
桃花「えっ？　誰？」
博人「なんか、お母さんって言ってたけど？」
桃花「えっ？」

SE　応接室のドアを開ける音。

桃花「ちょっと、母さん！」
律子「あ、桃花！」
武雄「すみません。職場まで押しかけてしまって」
桃花「ホントですよ。一体何の用なの？」
律子「結婚式、ここの式場で挙げることにしたの！」
桃花「ウソでしょ！」
律子「だって、どうしてもあんたに私たちの写真、撮ってほしかったのよ」
桃花「やめてよ。恥ずかしい……。とにかく、ここは職場だから。仕事終わったら、場所変えて話そう」

律子「はーい」

SE　居酒屋の店内の雑踏の音。

桃花「ところで、武藤さん」

武雄「はい？」

桃花「話し方に訛りがあるようですけど、どちら出身？」

武雄「熊本です」

桃花「はぁ～（っと溜息）。やっぱり……」

律子「何よ、何か問題ある？」

桃花「大ありでしょ!?　父さん、2代目、3代目、4代目……」

武雄「あの。どうかしました？」

桃花「母さんの歴代結婚相手。皆、熊本の人なんです」

武雄「そうなんですか？」

桃花「今まで散々、熊本の人と一緒に暮らしてきたんだから。方言くらいわかります！」

律子「ねぇ、桃花」

桃花「何？　まだ何かあるの？」
律子「新婚旅行、どこに行くと思う？」
桃花「知らないわよ」
律子「当ててみてよ～」
桃花「さあね。パーッと海外にでも行くつもり？」
律子「みずあかり、見に行くことにしたの！」
桃花「えっ……？」
律子「ほら、覚えてない？　熊本市でやってる熊本市暮らし人まつり」
桃花「覚えてる、けど……？」
律子「あんたが幼稚園のときよね？　私が冷えるからって言っても、上着も着ないで、和ろうそくの光の間、駆けずり回ってさ」
桃花「うん……」
律子「あの竹に彫られた柄が、ロウソクの火によって綺麗に浮き彫りになって」
桃花「全部覚えてる。キラキラした、みずあかり」
律子「あれは、忘れることができないわよ

ね！」

桃花「まるで夢の中にいるような光の世界だった。子どもの私でも、幻想的で美しいって、初めて思った」

律子「そこにね、武雄さんを連れて行ってあげたいのよ。ね、武雄さん」

武雄「あぁ」

SE　テーブルを勢いよく叩く音。

桃花「やめて！」

律子「桃花？」

桃花「あそこは私と母さんと、亡くなった父さんが初めて旅行した場所なの！」

律子「だから、そこに武雄さんを連れて行ってあげたいのよ」

桃花「それをやめてって、言ってるの！」

律子「どうして？」

桃花「亡くなった父さんは、私の中ではまだ生きてる」

律子「えっ？」

桃花「母さんは、父さんじゃなくても熊本の人なら、誰でも良いんでしょ？」

律子「何言ってるの？」

桃花「みずあかりの思い出は、私には父さんと行った、最初で最後の旅行をした場所なの！」

律子「桃花……」

桃花「そんな私の父さんの大切な場所に、他の男を、勝手に連れて行かないで！」

律子「ちょっと待って！　桃花！」

SE　入口のドアの開閉音。

幼い子供と父親の声。

桃花「父さん……。（と、シクシク泣いて）」

SE　風が吹き抜ける。

鈴虫の音色。

走る息遣い。

律子「あ、いた！　桃花！」

桃花「何よ……？」

律子「やっぱりここの公園だった」

桃花「どうしてわかったの？」

律子「あんたが小さい時、辛いことがあると、ここに来て父さんとよくアイスやお菓子、食べてたでしょ？」

桃花「何で知ってるの？」

律子「母さんが知らないとでも思ったの？」

桃花「はいはい。母さんは何でもお見通し」

律子「ねぇ、桃花」

桃花「何？」

律子「母さんね、みずあかり見に行くの、やめるわ」

桃花「えっ？」

律子「あんたが、そんなに父さんのことを思ってる間は、母さんは絶対に行かない」

桃花「でも……」

律子「みずあかりに行った時ね、あの時父さ

ん、自分の故郷を桃花に見せたいって、張り切ってた」

桃花「うん……」

律子「父さんあんたとの初旅行、1週間前から楽しみにして、浮かれていたの」

桃花「そうなの？」

律子「そうよ。みずあかりの時だって、迷子にならないようにって、あんたの手を片時も離さなかったの」

桃花「うん。覚えてる」

律子「あんたが、すぐ私たちの手を離して、光の空間の中に包まれちゃうから。二人ともう、ヒヤヒヤだったのよ？」

桃花「だって和ろうそくの光の中は、柔らかくて、温かくて。秋風の冷たさなんて、全然感じなかったんだもん」

律子「父さんもあの時、あんたの写真、いっぱい撮るんだって、頑張ってたわね」

桃花「思えば、その時だったな」

律子「何が？」

桃花「私が写真家になりたいって思ったの」

律子「そうなの？」

桃花「優しくて涙もろくて。私がクラスの男の子にいじめられると、すぐに飛んできて守ってくれて」

律子「そうだったわね……」

桃花「頼りがいがあって、繊細で。でも不器用で」

律子「それが、父さんの良い所だった」

桃花「私、そんな父さんのこと、大好きだったな」

律子「母さんも好き」

桃花「それなのに、どうしてだろうね。あんな交通事故に巻き込まれたの……」

律子「対向車線の車が、飲酒運転で父さんの車に突っ込んできたのが悪いのよ」

律子「父さんは悪くない」

桃花「うん……」

SE　鈴虫の鳴き声。

律子「ねえ、桃花」

桃花「何？」

律子「母さんね、今まで結婚した人は、皆父さんと同じだと思ってたの」

桃花「そんな訳ないじゃん！」

律子「そうなのよね。あんたの言う通り。どの人もみんな、父さんとは違ったわ」

桃花「父さんは、この世でたった一人しかいないよ」

律子「そう？」

桃花「当たり前でしょ？　他に父さんに変わる人なんていない」

律子「それが、いたのよ！」

桃花「えっ？」

律子「誰だと思う？」

桃花「もしかして、武藤さん？」

律子「そう。優しくて、頼もしくて。そのくせ、感情表現が不器用で」

桃花「父さんそっくり……」

律子「でしょ？」

桃花「けど、そんなの似ているだけで、父さんじゃない！　別人よ」

律子「そうね……」

桃花「でも、本気で好きになったの？」

律子「うん」

桃花「父さんと同じくらい？」

律子「うん」

桃花「武藤さんの中身が、お父さんと全く違っても、愛していけるっていえる？」

律子「うん！」

SE　風が吹き抜ける音。

鈴虫の音が鳴り響く。

桃花「そろそろ秋だね」

律子「そうね」

桃花「みずあかり、武藤さんと言ってきたら？」

律子「えっ？」

桃花「行きたいんでしょ？　武藤さんと」

律子「それは、そうだけど……」

桃花「行ってきなよ！」

律子「けど……？」

桃花「私、信じてあげる。武藤さんは、母さんが２番目に本気で愛した人だって」

律子「桃花……」

桃花「今度こそ、幸せになってよね！」

律子「ありがとう」

桃花「はぁ～。なんか、お腹空いたな」

律子「そうね」

桃花「仕事ももう終わったし。寒くなって来たから、戻ろっか！」

律子「うん！」

ＳＥ　結婚式の鐘の音。

出席者の賑やかな声。

カメラの連続シャッター音。

桃花「はーい！　新郎新婦さん、笑って！」

律子「困るわ、そんなに笑えって言われても」

桃花「あれ～？　新郎さん、顔が引きつってますよ？」

武雄「えっ？」

桃花「ほら、新婦さんの顔見て。もっとリラックスして！」

武雄「こ、こうですか？」

桃花「いいですね？　じゃあ今度は、見つめ合って撮りましょうか？」

律子「やだ！　照れるじゃない？」

桃花「結婚5回目なんだから。照れない、照れない」

律子「ちょっと、桃花ったら！」

桃花「いきますよ？　はい、笑って！　はい、チーズ！」

SE　カメラのシャッター音。

（END）